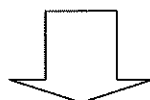


文化活動部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「豊かで創造的な文化活動の日常的な教育実践についてどうあるべきか」



2. 研究内容

【研究内容1】

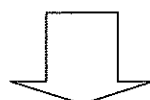
地域の素材を生かした文化的な教育実践
地域の人々や環境などとの関わりからつくる活動のあり方や工夫

- ア 地域人材の発掘・活用や地域と連携を図った教育実践
- イ アイヌ文化に関する研修
- ウ 地域の自然や施設を活用した教育実践
- エ 社会教育との連携を図った教育実践

【研究内容2】

効果的な読書活動のすすめ方
子どもたちが読書に親しむ効果的な指導や環境の工夫

- ア 地域ボランティアやPTAと協力した読み聞かせなどの実践や、読書指導の実践
- イ 調べ学習に役立つ図書館の活用法と実習
- ウ 学校図書館の運営や外部図書館との連携など、豊かな読書環境作りに取り組んだ実践



3. 研究方法

(1) 交流計画

部会便りの配付及びホームページによる情報の伝達をできるだけ行い、研究課題や研究内容の共通理解を図る。

(2) 分科会構成

第1分科会、第2分科会ともに、今年度は南北合同開催とする。

第1分科会「地域と教育活動」 会場：北広島市立北の台小学校 家庭科室

第2分科会「読書活動」 会場：北広島市立北の台小学校 体育館

(3) 研究協議会の内容と方法

研究協議会では、研究課題や研究内容に沿った実技講習と学校レポート発表による実践交流を行い、今年度の成果と課題を明らかにしていく。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

- 5月 8日 第一回部会役員研修会 研究計画の概要の確認
- 5月 25日 第二回部会役員研修会 部会当日の協議内容について
- 6月 29日 第三回部会役員研修会
研究協議会運営についての各分科会決定事項の確認と進行状況について
- 8月 22日 第四回部会役員研修会 研究協議会の進め方について検討
- 9月 5日 石教研課題部会研究協議会（会場：北広島市立北の台小学校）
第1分科会「地域と教育活動」：南北合同研究協議会
第2分科会「読書活動」：南北合同研究協議会
- 9月 28日 第五回部会役員研修会 協議内容の確認、成果と課題の洗い出し

(2) 部会役員研修会での研究成果

今年度は、5月～8月までの5回の役員研修会の中で、研究協議会に向けての準備が進められた。役員の入替わりがなかったこともあり、これまで積み上げてきた経験や活動をいかしながら、研究協議会へ向けた準備を進めることができた。内容に関わっては、昨年度の反省をもとに検討がなされ、役員の見解を取り入れながら、実践に根付いた協議会の計画が立てられた。また、各分科会の担当を分担することで分業され、研究協議会の運営をスムーズに進めることができた。

役員研修会では、研究の視点を確認し合う中で、どのような実技講習を企画したらよいか、また日頃の実践につながるレポート交流がより充実したものとなるための方策について検討を重ねた。講師をできるだけ早い段階で探して依頼せねばならず、外部機関の活用も検討した。実技講習会の方向性は、反省や部会員からの声を拾い上げて、ある程度前年度のうちに明らかにしておく必要がある。

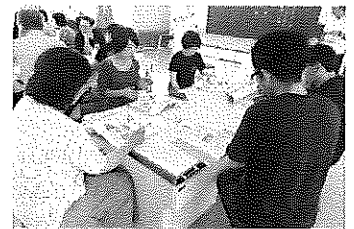
2. 課題部会研究協議会での交流

(1) 課題部会研究協議会での交流内容

第1分科会「地域と教育活動」 【管内開催】

① 実践レポート交流の様子

今年度は、16本のレポートが集まった。地域の人材や環境をどういかしていくかという点をテーマに掲げたレポートが多く集まり、各校の実践が紹介された。今年度もグループごとにレポート交流を行い、地域人材を活用する利点や課題等が具体的に話し合われ、有意義な時間となった。



② 実技講習「アイヌ伝統料理体験」

アイヌ文化を学ぶ取組として、今年度はアイヌ伝統料理体験を行った。

アイヌ文化活動アドバイザーの長縄由加里氏と石井美香氏を講師に招き、アイヌ料理のコンプシトとチェプオハウの調理体験を行った。コンプシトとは、昆布をすりつぶして作っただんごのことである。上新粉、白玉粉、昆布、グラニュー糖、サラダ油のみと材料は少ないが、“昆布を油で揚げて砕く”というのは新鮮で、部会員にも好評であった。



チェプオハウとは、魚（鮭）の汁物のことである。アイヌ学習の一環として実践し

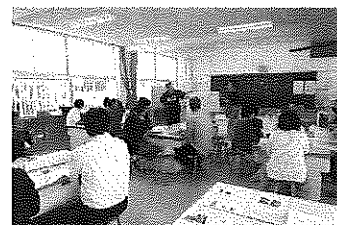
ている学校もあるが、今回は、本来の味に近い、塩味で料理を作った。

どちらの料理もアドバイザーの方に教えていただき、各学校に持ち帰っても実践できる内容である。“命をいただく”ことを伝えていくうえでも、今回のような体験活動はとても重要である。アイヌ料理がルーツで今日まで北海道の郷土料理として食べられているものを、今回の実技講習で体験できた。

③ 成果と課題

実技講習では、アイヌ伝統料理体験を行った。部会員それぞれが、自分の学校の子どもたちの姿を想像しながら体験できた。様々な形で実技講習を行っていくことは今後も継続していきたい。

実践レポート交流は、昨年度と同様に、今年度もグループごとに行った。各校の取組の様子を交流することができ、話し合いも積極的に行われていた。しかし、研究内容にある「地域の人々や環境などとの関わりからつくる活動のあり方や工夫」という点では、交流が中心となってしまう、議論を深めるところまでには至らなかった。話し合いの視点を整理して、次年度にいかせるように考えていきたい。



第2分科会「読書活動」

【南ブロック・北ブロック合同開催】

① 講演：「子どもたちに本の力を」～子どもと本と、出会いをつむぐ～

講師：佐々波 幸子 氏

(朝日新聞東京本社「声」編集次長)

豊かな読書環境作りを課題として、「子どもたちに本の力を」～子どもと本と、出会いをつむぐ～と題した講演会を企画した。講師には、2008～12年まで朝日新聞にて絵本や児童文学の新刊紹介欄「子どもの本棚」を担当、東日本大震災後に被災地へ本を届けるNPOの活動などを取材されている佐々波幸子氏を迎えた。

初めに、佐々波氏が取材された「オス子供図書館基金」の取組についてお話していただいた。ガーナの貧困地区を中心に図書館をつくる活動である。その図書館は「第二のわが家」とも言うべく、子どもたちが本を読む場というだけでなく、遊びの場、ときには朝食も出すこともあったという。本といえば教科書しか知らない子どもたちに「読書の喜びを伝えたい」という熱意をもち、寄付を募り活動する方々の話に、講演を聞いていた先生方も胸が熱くなったにちがいないだろう。

次に、佐々波氏が取材を通じ「本の力」を感じた経験として、「3.11 絵本プロジェクト」の取組が紹介された。東日本大震災の1ヵ月後から保育園での絵本の読み聞かせを行い、10年間継続されたボランティアで子どもたちに本を届ける活動が行われた。震災で不安や緊張を強いられる生活を送る子どもたちが読み聞かせに参加することで、ほんのひと時でも甘えられ、安心できる環境をと全国に呼びかけ、2ヶ月で23万冊の本が集まったそうだ。それだけ、全国に「絵本が何かの力になる」と感じた方が多くいたのではないかと佐々波氏は語った。

時に「第二のわが家」になる図書館、不安や恐怖の底にあっても一筋の希望の光となりうる「本の力」。その可能性を信じ、明日から目の前にいる子どもたちにも「本っていいよね」と少しずつでも伝えていきたいと強く感じずにはいられないお話であった。

さらに、佐々波氏が取材された多くの作家とのエピソードなども紹介していただいた。まどみちおさん、坂田寛夫さん、松谷みよ子さんといった有名な作家の言葉や人柄、戦争を経験した作家の想いなど、取材を通して受け止められた佐々波氏のお話は大変興味深いものであった。

参加者からは、「普段なかなか聞くことのできないお話でした。(本は人と人をつなぐことができる)ということを教えていただきました。」など、感想が寄せられた。

② 実践レポート交流の様子

今年度は、テーマ別に小グループをつくり、レポート交流を行った。第2分科会では、各校から38本のレポートが提出された。テーマは部会員の先生方に事前に提出してもらったレポートのタイトルから設定した「本と出会う！読み聞かせナウ」「本が好きな子になぁ〜れ！私の読書活動」「図書委員会活動」「図書ボランティア、学校図書館づくり」「ワクワクドキドキ読書企画」「私のおすすめの本を語りたい」「読書環境をかんがえよう」「司書教諭トーク&トーク」である。グループに分かれての交流では、自己紹介の折に、持参していただいた「私の一冊」の紹介も兼ねて行った。絵本あり、教育書ありと個性溢れる本の紹介に和やかな空気が流れていた。その後は、部会員の先生方のレポートをもとにした実践交流を行った。レポート交流をテーマ別的小グループで行ったことで、参加者からは「知りたい内容や悩みをより話し合えたように思います。」など、より焦点化した話し合いができてよかったという感想が多く寄せられた。

読書活動に関わる悩みや図書館運営に関わるご苦労など本音トークも交えながら、闊達な交流となった。

③ 成果と課題

今回の佐々波氏の講演を通して、物語が子どもたちに与える力について再認識することができた。また、図書館という場の多様な在り方、可能性にも改めて気づかされた。本と出会う楽しさや喜びの創造をこれからも部会のテーマとして追究し、今後も実践や図書館運営にいかすことのできる内容を取り上げた研修会を企画したい。

例年部会員のニーズとして、読書指導に関わることと図書館運営に関わる研修の希望が挙げられる。部会運営の課題として検討していきたい。

レポート交流においては、今回のようなテーマ別的小グループでの形が好評であった。交流テーマの焦点化を検討しつつ、早い時期に内容を知らせて準備ができるようにしたい。

Ⅲ. 部会研究の成果と課題

1. 成 果

第一分科会では「アイヌの伝統料理体験」の実技講習会、第2分科会では佐々波氏による講演会を行い、部会員は、本協議会を通して、新たな知識や体験、様々な取組を通して活動する人々の思いを学ぶことができた。学校に持ち帰って実践につなげていきたいという前向きな反省も多く寄せられ、有意義な研究協議会となった。文化活動部会では、これからも部会員が積み上げてきた実践を互いに学ぶ合うことを軸に、体験的・実践的な活動を取り入れた研究協議会を企画していきたいと考える。集まったレポートは、学校や地域の特色を生かした実践がまとめられたものばかりであった。管内における特色ある取組を交流していくことは、大変意義深い。子どもたちのいきいきとした活動の様子や作品の交流、地域との関わりを通して学びを深めていく姿、思考錯誤を重ねながら実践をつくりあげていく教師の声は、今後の実践に検討を加えていく原動力となるであろう。焦点化されわかりやすくまとめられたレポートを広く交流することは、部会員の大きな刺激となる。これからも部会の財産として共有し、蓄積していきたい。

また、今年度の研究協議会では、優れた実践を重ねている方に講師をお願いすることができた。両分科会ともに、講師の方の経験豊かな説明がわかりやすかったと好評であった。地域人材の活用や公共図書館との連携など、広く文化的な活動をとらえた交流を進められるよう、次年度以降も、積極的に外部講師を招くことを検討していきたい。

2. 課 題

それぞれの学校ごとにより取組がなされている。それを分科会ごとだけでなく、部会全体に環流することが大切であると考え。そのために、レポートをどのように活用していくかが課題であると考え。また、ほかの分科会で交流した内容について紹介し、実践できるようにしていくことも大切である。そのための方法について、HPや部会便りを活用していく必要がある。

(文責 佐藤 里英)